

# 馬場代2号墳

行橋市文化財調査報告書

第40集

2011

行橋市教育委員会



馬場代 2 号墳 全景



馬場代 2 号墳 出土鉄製品

## 序

本書は平成8年度に実施いたしました馬場代2号墳の発掘調査の報告書です。

調査では未盗掘の竪穴式石室を確認し、中から横矧板鉄留短甲、大刀、鐵鎌など豊富な副葬品が見つかりました。調査結果より5世紀後半に築造された、当時の地方豪族のお墓と考えられます。

馬場代2号墳は墓地造成に伴う工事で発見されましたが、関係各位のご理解、ご協力により、現地に保存され未来に伝えていくことができました。本遺跡の調査にご協力いただきました地元のみなさまをはじめ、調査にあたりご指導いただきました関係各位に心より感謝申し上げます。

本書が学術研究はもとより地域の文化財への理解と認識を深める一助として、広く活用されることを願います。

平成23年3月

行橋市教育委員会  
教育長 山田 英俊

## 例　　言

1. 本書は、福岡県行橋市大字馬場字平原 510 番地に所在する馬場代 2 号墳の発掘調査報告書である。
2. 調査は行橋市教育委員会が主体となって行った。
3. 遺構実測は辛嶋智恵子、木下孝子、国永敏枝、三井恭子、森脇世津子が行った。
4. 遺構写真は辛嶋が撮影した。
5. 遺構図の整理は山口裕平が行った。
6. 遺物の実測は宇野慎敏（財団法人北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室）、山口が行った。
7. 短甲の復元および鉄器の保存処理は九州歴史資料館に協力いただいた。
8. 遺物写真は山口が撮影した。なお短甲の X 線 C T 撮影は九州国立博物館に協力いただいた。
9. 遺構・遺物図面の浄書は奥野康代、鎌田尚子、河野竜二、松本まゆみが行った。
10. 本書に使用した方位は座標北である。
11. 本書に報告した遺物、図面、写真是行橋市教育委員会において保管している。
12. 本書の執筆・編集は辛嶋と協議し、山口が行った。

# 本文目次

第1章 はじめに	1
第1節 調査にいたる経緯	1
第2節 調査体制	1
第3節 調査の経過（日誌抄）	2
第2章 遺跡の位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
（1）京都平野の原始・古代	3
（2）馬場代2号墳周辺の古墳時代	5
第3章 調査の記録	7
第1節 遺構	7
（1）墳丘	7
1トレンチ	7
2トレンチ	10
3トレンチ	10
4トレンチ	10
5トレンチ	10
西側切通し面上層	10
墳丘規模と構築法	10
（2）主体部	10
石室の構造	10
床面	12
天井石	12
石室の構築法	12
第2節 遺物	12
（1）遺物の出土状況	12
（2）遺物の概要	14
横矧板鉢留短甲	14
大刀	15
鐵鏃	17
土器	17
石器	17
第4章 結語	18
第1節 馬場代2号墳の築造年代	18
第2節 京都平野における馬場代2号墳の位置づけ	19

# 図版目次

巻頭図版 1 馬場代 2 号墳全景

巻頭図版 2 馬場代 2 号墳出土鉄製品

- 図 版 1 1. 馬場代 2 号墳遠景（北から）  
2. 馬場代 2 号墳調査前〔手前は天井石〕（南から）  
3. 馬場代 1 号墳近景

- 図 版 2 1. 墳丘〔手前は周溝〕（東から）  
2. 馬場代 2 号墳全景（南から）

- 図 版 3 1. 1 トレンチ土層〔西半〕（南から）  
2. 1 トレンチ土層〔東半〕（南から）  
3. 2 トレンチ土層（南から）  
4. 3 トレンチ土層（西から）  
5. 4 トレンチ土層（西から）  
6. 5 トレンチ土層（北から）  
7. 西側切通し面上層（西から）

- 図 版 4 1. 石室掘方のライン（南から）  
2. 竪穴式石室北小口面  
3. 竪穴式石室南小口面

- 図 版 5 1. 竪穴式石室全景（北から）  
2. 枕石と大刀出土状況（西から）

- 図 版 6 1. 横矧板鉄留短甲前胴  
2. 横矧板鉄留短甲後胴

- 図 版 7 1. 横矧板鉄留短甲右側面  
2. 横矧板鉄留短甲左側面  
3. 地板と帶金の重なり方  
4. 蝶番金具

- 図 版 8 1. 横矧板鉄留短甲前胴 X 線 C T 写真  
2. 横矧板鉄留短甲後胴 X 線 C T 写真

- 図 版 9 1. 横矧板鉄留短甲左側面 X 線 C T 写真  
2. 横矧板鉄留短甲縱断面 X 線 C T 写真

- 図 版 10 1. 大刀  
2. 大刀茎部

- 図 版 11 1. 鉄鎌（3～32）

- 図 版 12 1. 鉄鎌（33～42）  
2. 矢柄の残存状況  
3. 土器  
4. 石器

## 挿図目次

- 第 1 図 馬場代 2 号墳の位置 (1/2,000,000)
- 第 2 図 京都平野の主要遺跡分布図 (1/80,000)
- 第 3 図 馬場代 2 号墳周辺遺跡分布図 (1/20,000)
- 第 4 図 馬場代 2 号墳墳丘測量図 (1/100)
- 第 5 図 馬場代 2 号墳周辺地形図 (1/200)
- 第 6 図 馬場代 2 号墳トレンチ土層図 (1/40)
- 第 7 図 馬場代 2 号墳石室・天井石実測図 (1/40)
- 第 8 図 馬場代 2 号墳遺物出土状態図 (1/40)
- 第 9 図 馬場代 2 号墳出土横矧板鎧留短甲実測図 (1/6)
- 第 10 図 横矧板鎧留短甲の各部名称
- 第 11 図 馬場代 2 号墳出土横矧板鎧留短甲構造図 (1/6)
- 第 12 図 馬場代 2 号墳出土大刀および鉄鎌実測図 (1/2・1/6)
- 第 13 図 馬場代 2 号墳出土鉄鎌実測図 2 (1/2)
- 第 14 図 鉄鎌の計測部位
- 第 15 図 馬場代 2 号墳出土土器・石器実測図 (1/3)
- 第 16 図 馬場代 2 号墳と稻童 8 号墳出土の横矧板鎧留短甲

## 表目次

- 表 1 鉄鎌計測表

# 第1章 調査に至る経緯と経過

## 第1節 調査に至る経緯

平成8年3月29日、行橋市大字馬場字平原510番地内において、個人墓地造成中に古墳の石室が見つかったとの通報が工事業者によって市教育委員会にもたらされた。

市文化財担当者が駆けつけたところ、すでに工事業者によって竪穴式石室の天井石が外され、その上面がブルーシートで覆われている状態であった。加えて前日の雨によりシートには水が溜まり、石室内に落ち込む状態であった。シートを外して石室内を確認したところ、シートに溜まった水の重みで短甲が潰れて破損しているのを確認した。以上のことから、市教育委員会では緊急な発掘調査の必要性を認め、土地所有者の正伝寺住職、塩田輝雄氏の承諾を得て、墓地造成に伴う調査を行うことになった。

本古墳の南西約40mには周知遺跡の馬場代古墳（文化財番号140300）がある。そこで馬場代古墳を馬場代1号墳と枝番をふり、新発見の本古墳を馬場代2号墳として調査を行った。

調査は平成8年4月1日から同7月23日まで、実数43日間をかけて行った。発掘調査を行った面積は約50m<sup>2</sup>で、調査体制は次節に示す通りである。

## 第2節 調査体制

### 現地調査（平成8年度）

総括	行橋市教育委員会	教育長	白石 潤
		教育次長	加来 博
		社会教育課長	永岡 正治
		社会教育課 文化係長	西江 文敏
調査		社会教育課 文化係	小川 秀樹
		社会教育課 文化係	辛嶋智恵子（調査担当）
		社会教育課 文化係	伊藤 昌広
		社会教育課 文化係	中原 博
庶務		社会教育課 文化係	西村 有二
発掘調査作業員			

岩鹿 美恵 木下 孝子 工藤美枝子 国永 敏枝 三井 恭子 森脇世津子

### 報告書作成（平成22年度）

総括	行橋市教育委員会	教育長	徳永 文晤（平成22年10月8日まで）
		教育長	山田 英俊（平成22年10月9日から）
		教育部長	三角 正純
		教育部 文化課長	酒井 和宣
調査		教育部 文化課長補佐兼文化財保護係長	小川 秀樹
		教育部 文化課 文化財保護係	伊藤 昌広
		教育部 文化課 文化財保護係	中原 博
		教育部 文化課 文化財保護係	山口 裕平（報告書担当）
庶務		教育部 文化課 文化振興係長	辛嶋智恵子
		教育部 文化課 文化振興係	北田千砂子
整理作業			

枝吉 恵美 奥野 康代 鎌田 尚子 河野 竜二 佐々木豊子 下野 恵美子 松本まゆみ

### 第3節 調査の経過（日誌抄）

平成8年3月29日（金）【曇り】

工事業者から市教育委員会へ古墳発見の届出。文化財担当者が現地に赴く、工事業者より事情聴取。土地所有者と協議し、4月より発掘調査を行う方向で協議を行う。

平成8年4月1日（月）【曇り】

発掘調査開始。石室内に落ち込んだ土を除去する。天井石の内側に赤色顔料を確認。原位置を動いた短甲、鉄鏃を取り上げる。石室内の清掃を行う。石室南側に閉塞石の可能性がある石の表面を出し、現状の写真を撮影。

平成8年4月3日（水）【晴れ】

石室主軸に直交するトレーナーを2箇所設定する。北側を1トレーナー、南側を2トレーナーとして掘り下げ開始。南西の通路側切り通し面の土層を観察。午前、飛野博文氏（福岡県教育委員会）来庁し、昨日取り上げた短甲、鉄鏃を見学する。その後、現地にて調査指導を受ける。

平成8年4月4日（木）【晴れ】

1トレーナー、2トレーナーの掘り下げにより石室墓壙ラインを検出。通路切り通し面の土層を分層し、図面作成と写真撮影を行う。

平成8年4月6日（土）【晴れ】

土地所有者等と協議。調査経過説明を行い、調査範囲を確定する。

平成8年4月8日（月）【晴れ】

墳丘伐採を行い、その後写真撮影。

平成8年4月9日（火）【晴れ】

周辺地形の平板測量にかかる。

平成8年4月11日（木）【曇りのち晴れ】

墳丘の平板測量を行う。

平成8年4月17日（水）【曇り一時雨】

石室南側の石を除去。当初閉塞石と考えていたが、南壁面を確認したため、すべて落ち込んだ石と判断する。このことから石室形態は竪穴式石室であることが判明する。併せて石室内側の全面にわたり赤色顔料を塗布していることを確認する。床面は玉砂利敷きで、精査中に東壁面に沿って大刀を検出。また南壁側より枕石を検出。

平成8年4月18日（木）【晴れ】

石室床面を精査する。中村修身氏（北九州市教育委員会）来跡する。

平成8年4月22日（月）【晴れ】

大刀の出土状況の実測図を作成する。写真撮影を行い、大刀を取り上げる。

平成8年5月9日（木）【晴れ】

17日ぶりの現場となる。石室内の清掃を行い、玉砂利の床面を出す。また、墳丘の表土剥ぎを行うが、盛土の確認ができない。トレーナーの掘り下げを行う。木下修氏（福岡県教育委員会）来跡する。

平成8年5月10日（金）【晴れ】

小田富士雄氏（福岡大学人文学部）来庁し、出土遺物を見学する。その後、現地の見学を行う。

平成8年5月11日（土）【晴れのち曇り】

梅崎恵司氏（財團法人北九州市教育文化事業団）来庁する。

平成8年5月13日（月）【晴れ】

石室床面の清掃が終わる。墳丘の表土剥ぎを行う。

平成8年5月14日（火）【晴れ】

石室墓壙ラインの検出を行う。頭位の南側が分かりにくいため。

平成8年5月15日（水）【晴れ】

写真撮影に備え、石室周囲の清掃を行う。併せて墳丘表土剥ぎ、清掃を行う。

平成8年5月16日（木）【晴れ】

墳丘の表土剥ぎ、清掃を行う。考えていたより表土、複雑な土が厚く堆積している。茶褐色の盛土を確認する。石室周囲の清掃を行い、写真撮影を行う。

平成8年5月22日（水）【晴れ】

記者発表を行う。

平成8年5月24日（金）【晴れ】

墳丘の表土剥ぎが終わる。

平成8年5月27日（月）【曇り時々雨】

石室、墳丘の清掃を行い、写真撮影を行う。石室東側に3トレーナー、西側に4トレーナーを設定。石室墓壙ラインの検出につとめる。トレーナーの延長に5トレーナーを設定し、墳丘底部を探す。

平成8年5月28日（火）【曇り】

5トレーナーで周溝と思しき黒色土のたまりを検出する。1トレーナーを延ばし、5トレーナーで検出した黒色土のたまりを認める。周溝の可能性が高くなる。馬場代2号墳は周溝を含めて墳丘径約14mと考えられる。

平成8年6月3日（月）【曇り時々晴れ】

1～4トレーナーの掘り下げを行う。石室の実測を開始する。

平成8年6月5日（水）【晴れ】

辛嶋直治氏（勝山町教育委員会）来跡する。

平成8年6月6日（木）【晴れ】

トレーナーの掘り下げ完了し、土層を分層する。

平成8年6月11日（火）【曇り】

トレーナー土層断面の写真撮影、実測を行う。

平成8年6月13日（木）【晴れ】

全体写真撮影のための清掃。

平成8年6月14日（金）【曇りのち雨】

全体写真撮影を行う。1号墳の測量を行なうため伐採をする。

平成8年6月18日（火）【曇りのち雨】

墳丘調査区の平板測量を行う。1号墳の地形測量を行う。

平成8年7月1日（月）【晴れのち曇り】

久しぶりの現場。石室および天井石石材の実測を行う。

1号墳の墳丘測量を行う。

平成8年7月2日（火）【晴れ】

1号墳の墳丘測量が終わる。2号墳の石室実測は引き続き継続。

平成8年7月23日（火）【晴れ】

石室実測終了。床面を部分的に掘り下げ、地山を確認する。バックホーで天井石を架ける。トレーナーの埋め戻しを行い、現地での調査を終了する。

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

福岡県行橋市は県東部に所在する。この地域は旧郡名の頭文字を取り京築地方と呼ばれ、行橋市はその中心都市で人口72,377人（平成23年1月末日現在）を擁す。

市域は京都（行橋）平野の中央部を占め、東に豊前海（広域には周防灘）を臨む。山地は少なく、南西部に馬ヶ岳〔216m〕、御所ヶ岳〔246.9m〕が東西に連なり、みやこ町肥津・犀川地域と画す。北九州市小倉南区と接する北西部は国指定特別天然記念物の平尾台カルストの石灰岩台地が広がる。他に観音山〔202m〕、幸ノ山〔178m〕、覗山〔121.7m〕など少数の独立山塊がある。

市内には英彦山を源とする今川、祓川をはじめ、小波瀬川、長崎川、江尻川、音無川などの中小の河川が流れ、豊前海に注ぐ。

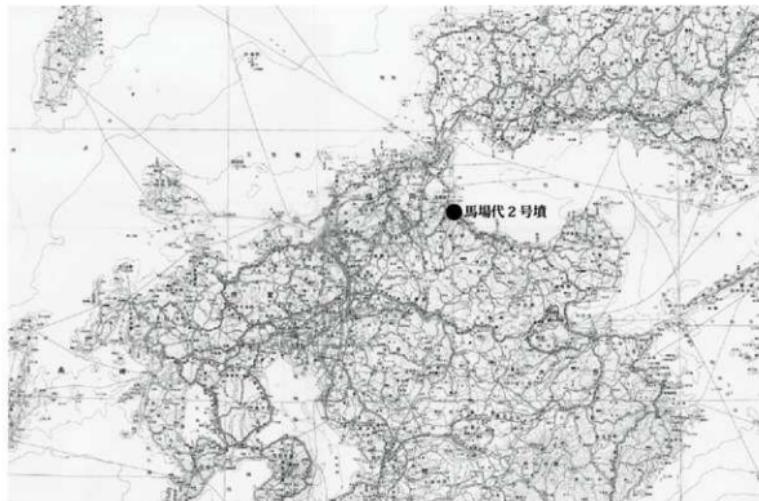
本書で報告する馬場代2号墳は、市の東部中央に所在する覗山の北西山麓、標高28m地点に所在する。行政地番は行橋市大字馬場字平原510番地内にあたる。

### 第2節 歴史的環境

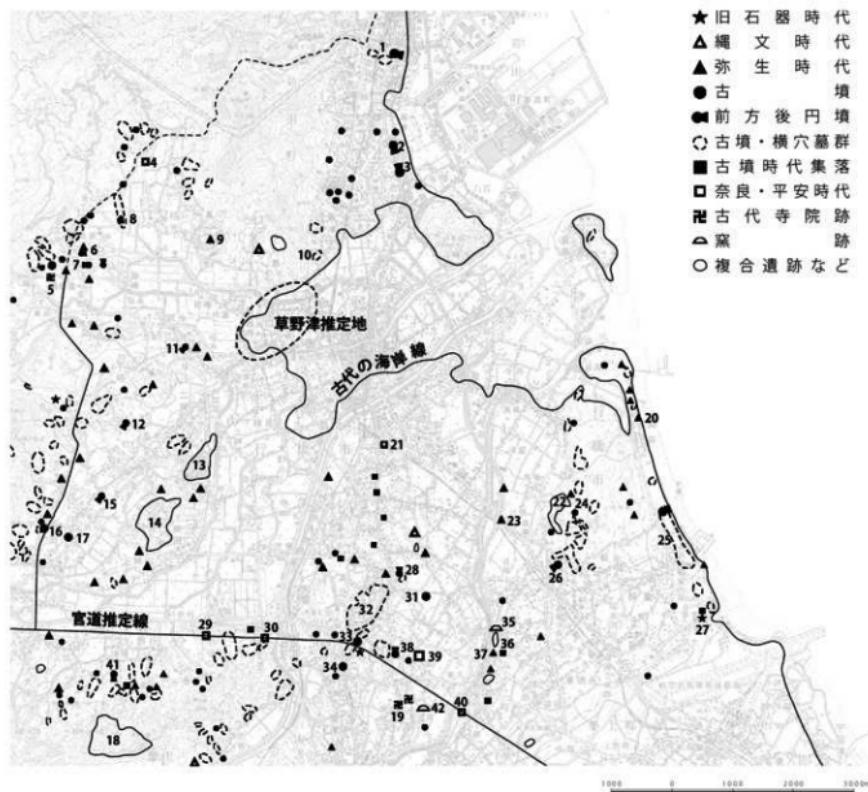
#### （1）京都平野の原始・古代

京都平野における人類の痕跡は、今からおよそ3万年前の後期旧石器時代初頭にさかのぼり、市域では渡築柴遺跡C区で該期の石器および礫群が見つかっている。

続く縄文時代は、全国的に温暖化の影響で海進が発達した。そのピークは約4800年前頃で、現在の延永一津熊一大橋一今井一津留を結ぶラインがその頃の汀線と考えられている。この汀線は弥生時代以降若干海退するものの、江戸時代以来の干拓によって、糸島と陸続きになるまで、京都平野は現在とは大きく異なる内湾性の臨海平野を形成していた（第2図）。縄文時代の遺跡は、遺構は不明確ながら、草期の押型土器（竹並遺跡など）、前期の轟B式土器（轟童野稻迫遺跡）、後期の西平式系土器（下崎瀬戸溝遺跡）



第1図 馬場代2号墳の位置(1/2,000,000)



1. 石塚山古墳	2. 番塚古墳	3. 制所山古墳	4. 谷瀬跡	5. 桥市廢寺	6. 黒添メウタ塚古墳
7. 徳永丸山古墳	8. 神後古墳	9. 鶴川遺跡	10. 猪黒古墳群	11. ピワノクマ古墳	12. 八雷古墳
13. 前田山遺跡	14. 下神田遺跡	15. 庄屋塚古墳	16. 犬塚古墳	17. 桶塚古墳	18. 阿所ヶ谷神籠石
19. 豊前国分寺跡	20. 長井遺跡	21. 森野遺跡	22. 代遺跡	23. 辻垣遺跡	24. 黑場代2号墳
25. 稲童古墳群	26. 隼人塚古墳	27. 渡築葉室遺跡	28. 竹並ヒメコ塚古墳	29. 大谷車塚遺跡	30. 天生田大塚遺跡
31. 鹿熊遺跡	32. 竹並遺跡	33. 甲塚方墳	34. 佐藤甲塚古墳	35. 屋敷窯跡	36. 織先遺跡
37. 徳永川ノ上遺跡	38. 惣社古墳	39. 豊前国府跡	40. 牧見鶴ノ口遺跡	41. 片峰1号墳	42. 德政瓦窯跡

第2図 京都平野の主要遺跡分布図 (1/80,000)

など各期の遺物が近年になり徐々に知られるようになってきた。

2500年前頃を境に、狩猟採集を生業の主体とした縄文時代から次第に稲作農耕へと変化していく。この地域の弥生時代早期の遺跡は長井遺跡が著名である。京都平野において遺跡が爆発的に増加するのは弥生前期後半からで、下神田遺跡、前田山遺跡など大規模な集落が形成される。

3世紀後半頃に始まる古墳時代には九州で最大・最古級の畿内型前方後円墳である石塚山古墳が苅田町域に築かれ、その海浜部で前期から中期への首長墓系譜をたどることができる。後期には京都平野内陸部に移動し、市内では八雷古墳が6世紀前半の首長墓と考えられる。

7世紀になると全国的に古墳建築も停止傾向にあり古墳時代の終末期に入るが、京都平野では古墳時代

終末期になっても古墳築造が盛行する。市内では福丸古墳群、渡築紫古墳群などが調査されている。この時代は古代史の上では飛鳥時代であり、仏教文化が地方にも根付き始めた頃である。市内では福丸地区に椿市廃寺が建立された。またこの頃、対大陸・半島情勢の悪化に伴い、御所ヶ谷に古代山城である御所ヶ谷神籠石が築かれた。

## (2) 馬場代2号墳周辺の古墳時代（第3図）

馬場代2号墳が所在する鶴山周辺は、市内でも遺跡の多い地域であるが、平成18年度に行った遺跡分布の悉皆調査、『行橋市史』の刊行等で、新たな歴史が発掘してきた。

まず北東の長井作り山遺跡で、弥生時代から古墳時代へ移る過渡期の墳墓が調査された。方形周溝墓で周溝底から小型丸底壺が見つかっている。主体部は一部の石材を留めるのみで、詳細不明。周溝を含めた墓の規模は一辺16m程である。

東の海浜部には前期から後期の古墳25基からなる稻童古墳群がある。うち調査された前期古墳は11～13号墳、15号墳の4基がある。なかでも15号墳は径6m、高さ2mの小型円墳だが、主体部の箱式石棺から翡翠勾玉、鉄劍などの他、全国的に類例が少ない方形板革綴短甲が出土した。

続く中期古墳には古墳群の盟主墳である石並古墳（20号墳）、8号墳、21号墳などが築かれた。石並古墳は帆立貝形を呈し、墳長68m、後円部径58m、前方部幅20mで、その外に幅6mの周壕が二重にめぐる。後円部は二段築成で頂部は截頭形をなし、径17mの平坦地となる。その中央部は石室の崩落により凹む。墳丘から朝顔形埴輪、円筒埴輪が採集されており、斜面には葺石も認められる。5世紀中頃の築造と考えられる。

石並古墳の周辺には17～19号墳、21号墳の陪塚と思しき円墳が4基あり、そのうち19・21号墳は発掘調査され、21号墳から豊富な副葬品が見つかった。墳径22m、高さ3.3mの竪穴系横口式石室を主体部とする。副葬品には立飾付眉庇付冑、三角板銅留短甲、横矧板銅留短甲、頸甲、脯当、刀劍、鐵鎌、鏡など豊富である。築造は5世紀後半と考えられる。ここからやや南にある8号墳も同時期の築造と考えられる。墳径20m、高さ4mの竪穴系横口式石室を主体部とする円墳で、副葬品には衝角付冑、横矧板銅留短甲、刀劍、鐵鎌、馬具、鏡などがある。

馬場代2号墳も副葬品の組成などから、稻童21号墳、8号墳より若干後出する時期に築造されたと考えられる。

後期古墳は稻童古墳群中に4・22～24号墳など数基ある。いずれも横穴式石室を主体部とし、須恵器、土師器などが出土した。調査された後期古墳群は他にも、覗山西麓にある穴田古墳群中の11号墳がある。横穴式石室からは須恵器、土師器、耳環が出土した。

覗山西麓の隼人塚古墳は京都平野を代表する後期の前方後円墳で、現状で墳長39m、後円部径17m、高さ5m、前方部幅13.5m、高さ3mを測る。全体的に削平を受けているため、築造時の規模は若干大きいものと思われる。後円部には南に開口する巨石を用いた複室構造の横穴式石室がある。玄室は盜掘を受けていたが、前室と羨道から直刀3振、弓金具、鐵鎌30本以上の武器類、轡・鐙などの馬具、鉄斧・砥石などの工具、耳環・銀製空玉・丸玉などの装身具、須恵器が出土した。6世紀後半に築造され、末頃に追葬されたと推定される。当地域で最後の前方後円墳である。

南の音無川河口部の台地上に立地する渡築紫古墳群（渡築紫遺跡A区）は6世紀末～7世紀後半にかけて営まれた終末期群集墳で、29基の円墳と方墳が混在して3,000m<sup>2</sup>の狭い範囲に密集して築かれている。近接して当時の集落跡（渡築紫遺跡B区）も確認されている。その北側の稻童豊後塚古墳群でも同時期の古墳を17基調査した。稻童豊後塚15号墳では骨蔵器の形をした須恵器把手付壺が副葬されており、墓制における古墳時代から次の時代への過渡期の様相を窺うことができる。



1. 馬場代古墳群(★が2号墳)  
 2. 小追谷古墳群  
 3. 穴田古墳群  
 4. 馬場観音山古墳群  
 5. 馬場山ノ神池東古墳群  
 6. 親山古墳群  
 7. 高瀬欠塚古墳群  
 8. 高瀬宮山古墳群  
 9. 半人塚古墳  
 10. 稲童古墳群  
 11. 稲童豊後塚古墳群  
 12. 渡柴紫古墳群

第3図 馬場代2号墳周辺遺跡分布図(1/20,000)

# 第3章 調査の記録

## 第1節 遺構

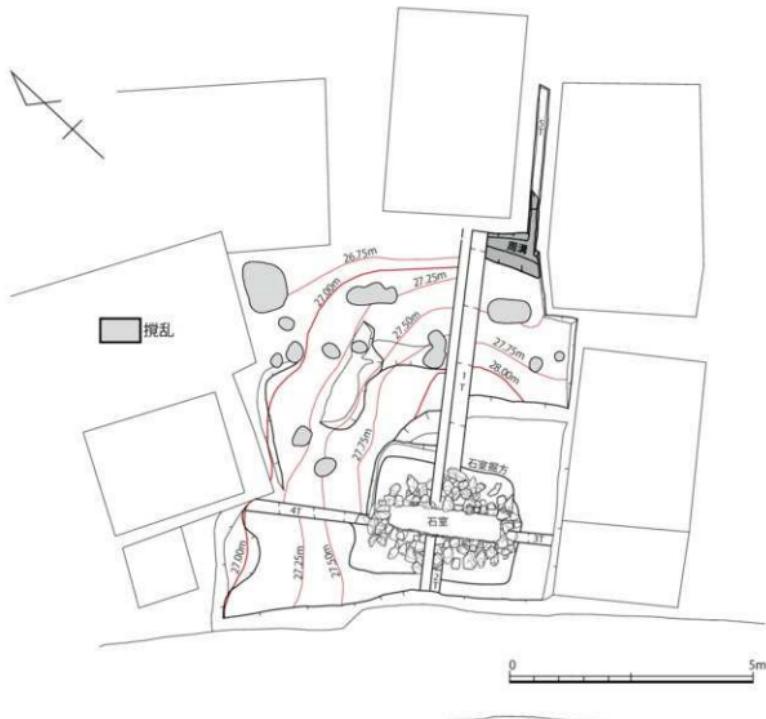
### (1) 墳丘

墓地が石室周辺まで立て込んでおり、現状では墳丘の旧状を推定することは困難である。調査では墳丘の規模および構造、周溝の有無、石室掘方などを確認するため5本のトレンチを設定した。以下、各トレンチの調査から得た所見を示す。

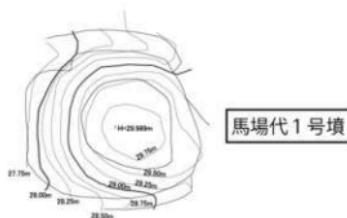
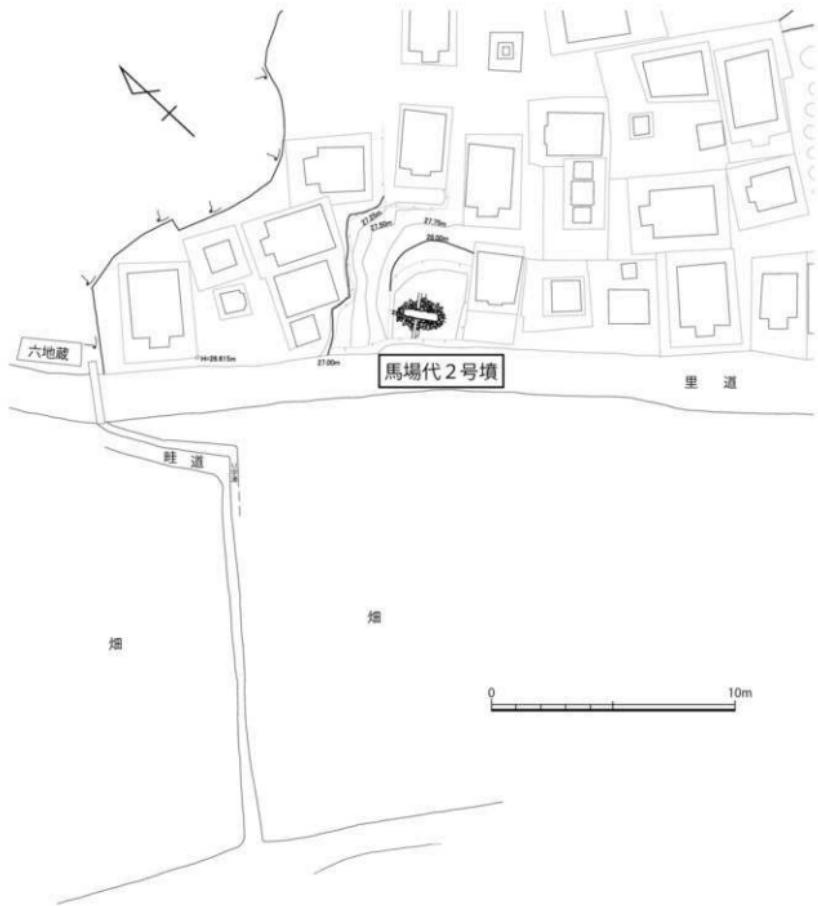
なお方位について、石室主軸は磁北より西に振れるが、便宜上、厳密なところでの北西を北、南東を南、北東を東、南西を西として記述を行う。

#### 1トレンチ（第6図・図版3）

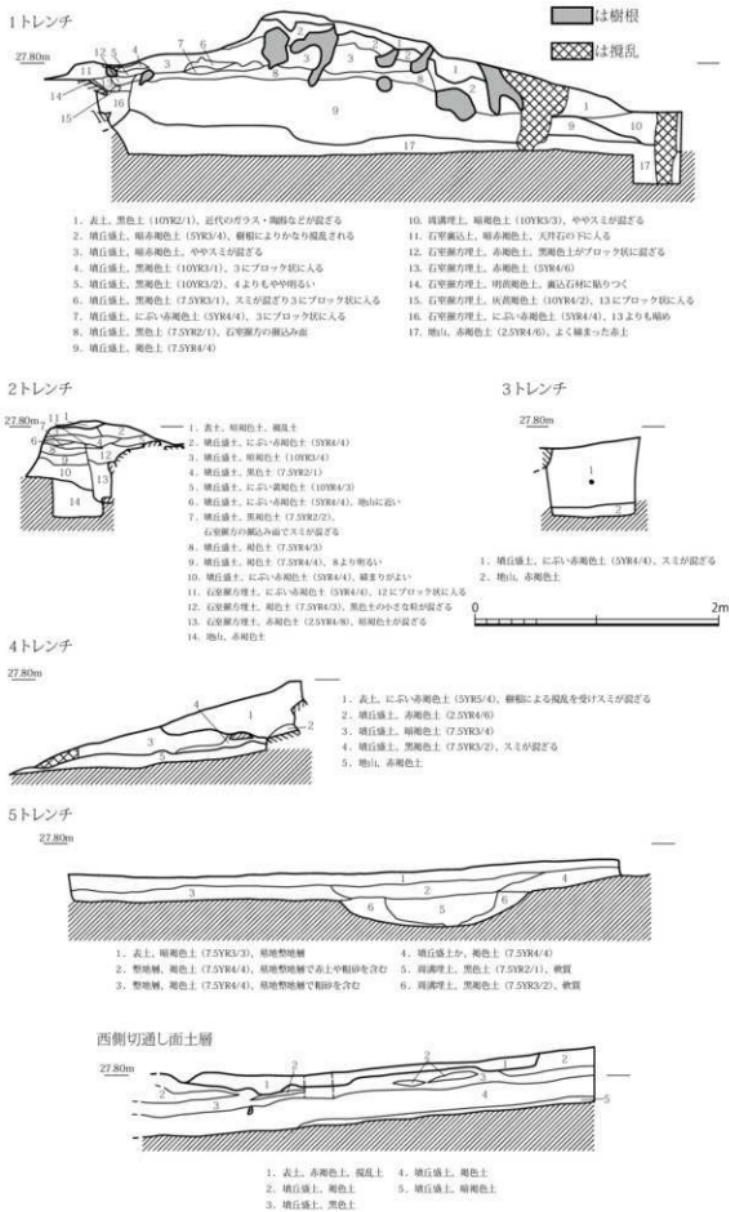
石室の東に設定した。長さ5.5m、幅0.4mを測る。基本層序は上から表土、擾乱土、墳丘盛土、地山となる。表土下より墳丘盛土を検出した。ゴミ穴、樹根などの擾乱を受けており良好に遺存するとはいえないが、上部は褐色系の土が互層状に盛られている。下部は黄褐色土の1層である。残りの良い地点で1m程の厚さがある。トレンチ西端から約0.75mの地点で、石室掘方ラインを検出した。墳丘盛土を垂直に切り込み、地山面まで達している。埋土は赤褐色系の土である。トレンチ西端から約4.5mの地点で盛土は屈曲点をつけ薄くなり、その上に炭混じりの暗褐色土がたまる。土層断面の形状、またその位置から周溝埋土と判断される。



第4図 馬場代2号墳墳丘測量図(1/100)



第5図 馬場代2号墳周辺地形図(1/200)



第6図 馬場代2号墳トレンチ土層図(1/40)

## 2 トレンチ（第6図・図版3）

石室の西に設定した。長さ 1.35m、幅 0.4m を測る。基本層序は上から表土（攪乱土）、墳丘盛土、地山となる。

表土下より互層状に積まれた墳丘盛土を検出した。残りの良い地点で 0.55m の厚さがある。トレンチ北端から約 0.85m の地点で、石室掘方ラインを検出した。墳丘盛土、地山面を切り込み、埋土は褐色を呈す。

## 3 トレンチ（第6図・図版3）

石室の南に設定した。長さ 0.85m、幅 0.4m を測る。基本層序は上から墳丘盛土、地山となる。

表面は標高 27.7m である。墳丘盛土は赤褐色を呈す一層で、残りの良い地点で 0.55m の厚さで積まれる。石室掘方ラインは石室の控え積みに接しており、埋土はない。

## 4 トレンチ（第6図・図版3）

石室の北に設定した。長さ 2.5m、幅 0.4m を測る。基本層序は表土（攪乱土）、墳丘盛土、地山となる。

表土は攪乱を受け、墳丘盛土はトレンチ南端から 1.2m、標高 27.40m の地点で検出した。残りの良い地点で 0.2m の厚さで積まれ、褐色を呈す。なお明確な石室掘方ラインは検出できなかった。

## 5 トレンチ（第6図・図版3）

周溝の規模を確認するために、1 トレンチの南に平行するように設定した。長さ 4.7m、幅 0.4m を測る。基本層序は上から表土、整地層、周溝埋土、地山となる。

表土ないしその下層は墓地造成時の整地層と考えられ、それぞれ厚さを等しくしほば平らに堆積する。トレンチの西側では墳丘盛土と思しき褐色土が流れている。トレンチ西端から 0.75m の地点に地山の変換点があり、土層断面の形状から周溝の肩と判断できる。1 トレンチで確認した周溝の延長上にあたり、現状で幅 1.55m、深さ 0.25m を測る。埋土は黒色系のやわらかい土である。

## 西側切通し面上層（第6図・図版3）

また古墳の西を通る里道の切通し面（長さ 3.7m）で土層観察を行った。

表土は攪乱されているが、その下部に褐色ないし黒色系の墳丘盛土を検出した。残りの良い地点で 0.5m 程の厚さがある。

## 墳丘規模と構築法

以上より馬場代 2 号墳の墳丘規模について考える。1 トレンチでトレンチ南端から 4.5m の地点で盛土は屈曲点をもち、そこが周溝の肩と考えられる。よって、石室中心点から周溝の肩までの約 5.5m が古墳の半径となり、墳径は約 11m に復元できる。その外には周溝がめぐる。周溝幅は 5 トレンチで確認し、幅約 1.5m を測る。周溝を含めた古墳の直径は約 14m となる。

また、墳形は盛土の遺存状況が悪いため判然としないが、墳丘の等高線が弧を描くため円墳と考えておきたい。墳形については今後の調査によるところが大きいと思われる。

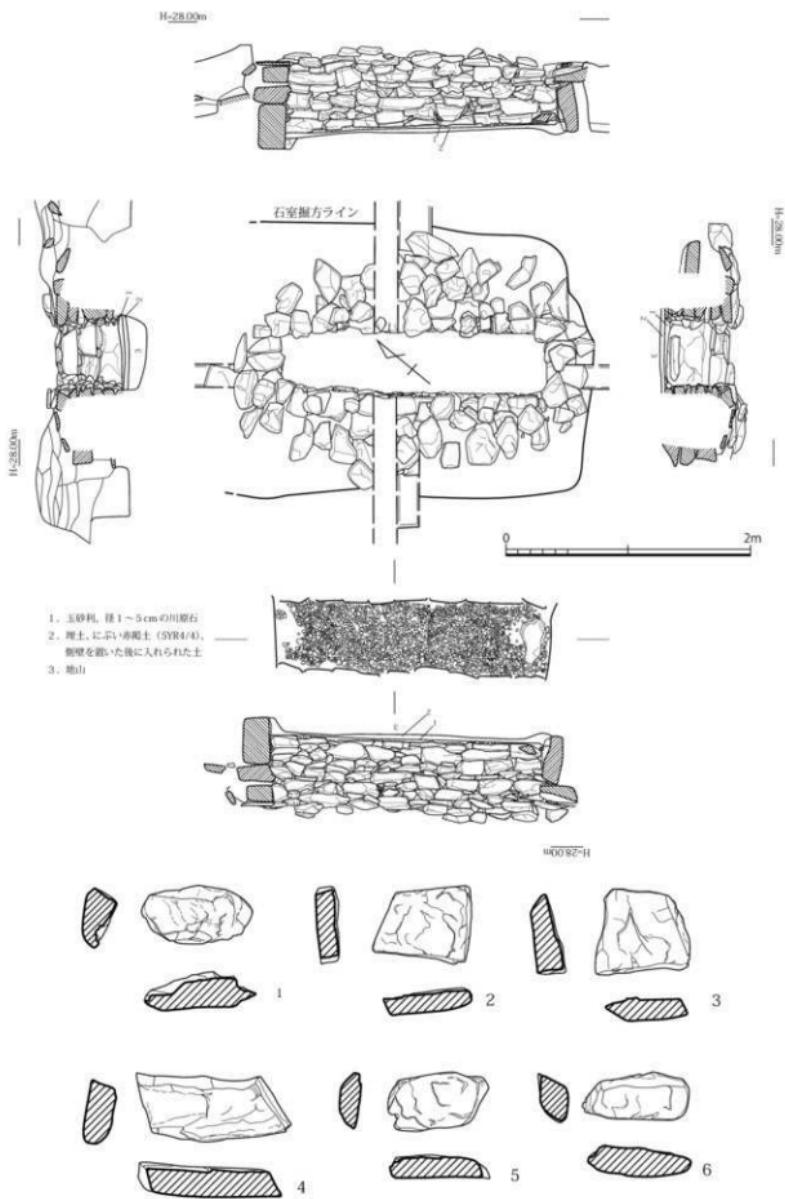
盛土はいわゆる版築層ではないが、褐色系の土を互層状に積んでいる。後世の攪乱があるが、最も良く残る地点で厚さ 1m ほどである。その直下は赤土の地山となる。石室の墓壙（掘方）は墳丘盛土を垂直に切り込み、地山面まで達している。墓壙埋土は墳丘盛土とよく似た褐色系の土である。

## （2） 主体部（第7図）

### 石室の構造

主体部は小型の堅穴式石室で、石室の主軸方位は N-39°-W である。

石室の平面プランは長方形で、その内法は、床面で全長 2.40m、小口幅は北壁で 0.53m、南壁で 0.60m である。天井石までの高さは、北壁で 0.58m、南壁で 0.59m を測る。立体的にはかなり狭長な直方体を呈す。内側全面にわたり赤色顔料を塗布する。



第7図 馬場代2号填石室・天井石実測図(1/40)

墳丘に設定したトレンチ調査の結果、石室の構築にあたって、墳丘を切って石室墓壙を掘り込んでいることが分かった。北方向では明確でないが、東西方向の1・2トレンチ、南の3トレンチで墓壙の掘方ラインを検出した。墓壙は長方形を呈すと考えられ、東西2.2m 南北3.2m程である。

石室の小口部には石室幅全体にわたり推定幅0.7m、高さ0.4m程の大きな割石を腰石として据え、その上面を2~3段で割石を小口積みする。北壁は垂直に構築されるが、南壁はやや内傾する。

側壁は扁平な割石を小口積みする。大きな石材で幅50cm程測り、使用位置は下位、上位関係なく万遍に使用される。その石材間に10cm程の割石をはめ込んで仕上げる。石積みは横方向に目地が通り、明確な縦目地は通らない。両側壁ともに垂直に構築される。側壁の積み方はやや雜で、隙間が空くところも多い。  
床面

床面は地山成形後、赤褐色土で整地する。整地層は4~5cmの厚さがあり、この整地で小口部腰石および側壁最下段の石を固定する。その後床面には大きさ1cmに満たないものから5cm大ほどの玉砂利を一面に敷く。玉砂利は近くの河川より搬入したものと思われる。

北壁に沿って長さ40cm、厚さ10cm程の扁平な石材が置かれていた。死者を安置した際に据えた枕石で、赤色顔料が塗布される。

#### 天井石

天井石は市文化財担当者が報告を受け駆けつけた時にはすでに全部外されていたが、工事業者に対する聞き取り調査の結果、天井石の架構状況を復元することができた。第7図の1~6に示したよう石材は全部で6石あり、その長軸線が平行するように天井石として架けていた。1の石材を石室の北に架け、南へと番号順に並んでいたとされる。最も大きな4の石材で、長軸1.25m、短軸0.5m、厚さ0.25mを測る。

天井石の裏側には赤色顔料が塗布されている。上述したように、石材を天井石として架けたあとに、側壁とあわせて赤色顔料を塗布したものと考えられる。

なお、天井石を動かした際に石材と土が石室中に落ち込んだ。調査当初は閉塞石とも考えたが、竪穴式石室であることが判明したことから天井石直下にあたる石室上部の石材が転石したものと判断した。土は灰黄褐色の粘質土で、天井石を固定するために使用した粘土と考えられる。

#### 石室の構築法

以上より、石室の構築は大きく3つの工程を踏んでいることが分かる。

- ①石室墓壙を掘り、腰石を据えると同時に整地を行う。
- ②床面に玉砂利を敷き、壁石を積み上げる。
- ③天井石を架構し、赤色顔料を塗布する。

## 第2節 遺物

### (1) 遺物の出土状況(第8図・図版5)

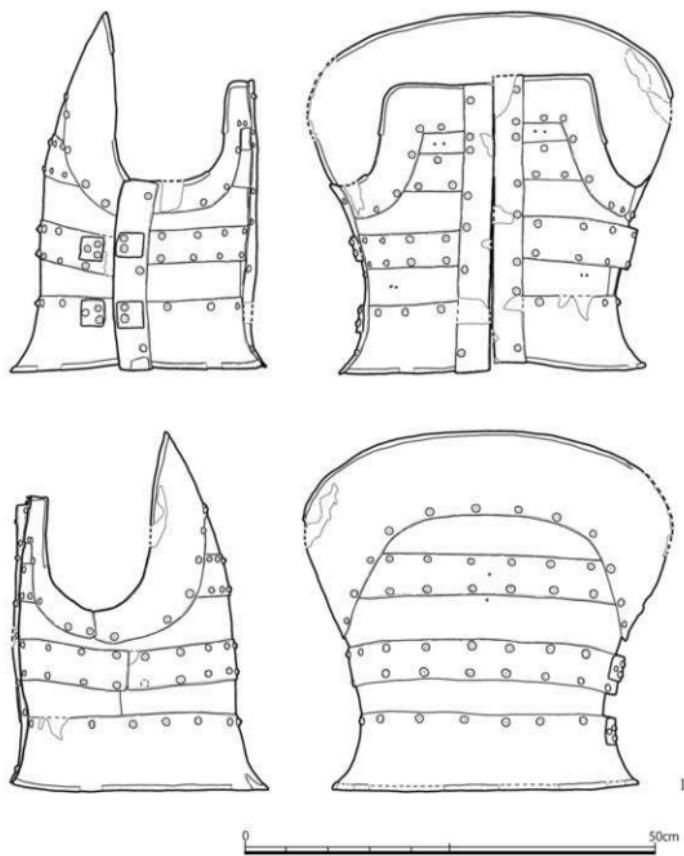
馬場代2号墳の竪穴式石室からは横矧板鎌留短甲1領、大刀1振、鉄鎌40本が出土した。盗掘等など後世の改変を受けていないため、出土時の状況が埋葬時の状況を示しているといえる。

横矧板鎌留短甲は先述のように市文化財担当者が報告を受け駆けつけた時には破損した状態であった。鉄鎌40本も原位置を保っていないかったが、回収作業や聞き取り調査から、石室北壁に短甲を立て、その脇部内に鉄鎌が束ねられた状態で置かれていたことが分かった。大刀は柄を南壁に向けて、東側壁の南側に沿って出土した。

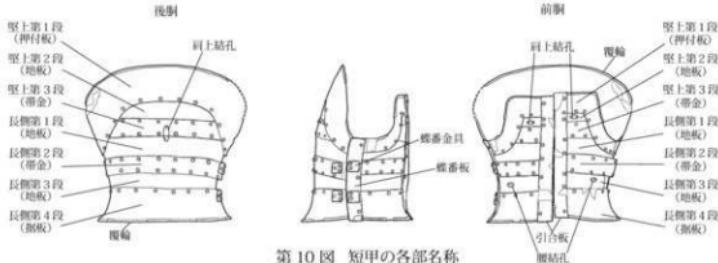
枕石の存在から頭位は南側である。よって大刀は被葬者の右半身上位に、短甲と鉄鎌の束は足元にあたる位置に副葬されたと判断できる。



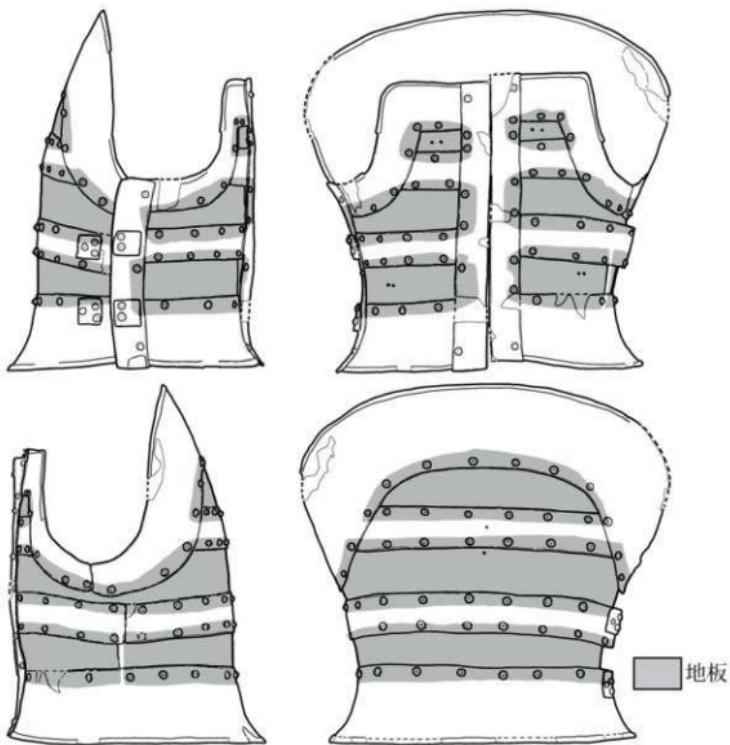
第8図 馬場代2号墳遺物出土状態図(1/40)



第9図 馬場代2号墳出土横矧板鎖留短甲実測図(1/6)



第10図 短甲の各部名称



第11図 馬場代2号墳出土横矧板鉄留短甲構造図(1/6)

## (2) 遺物の概要

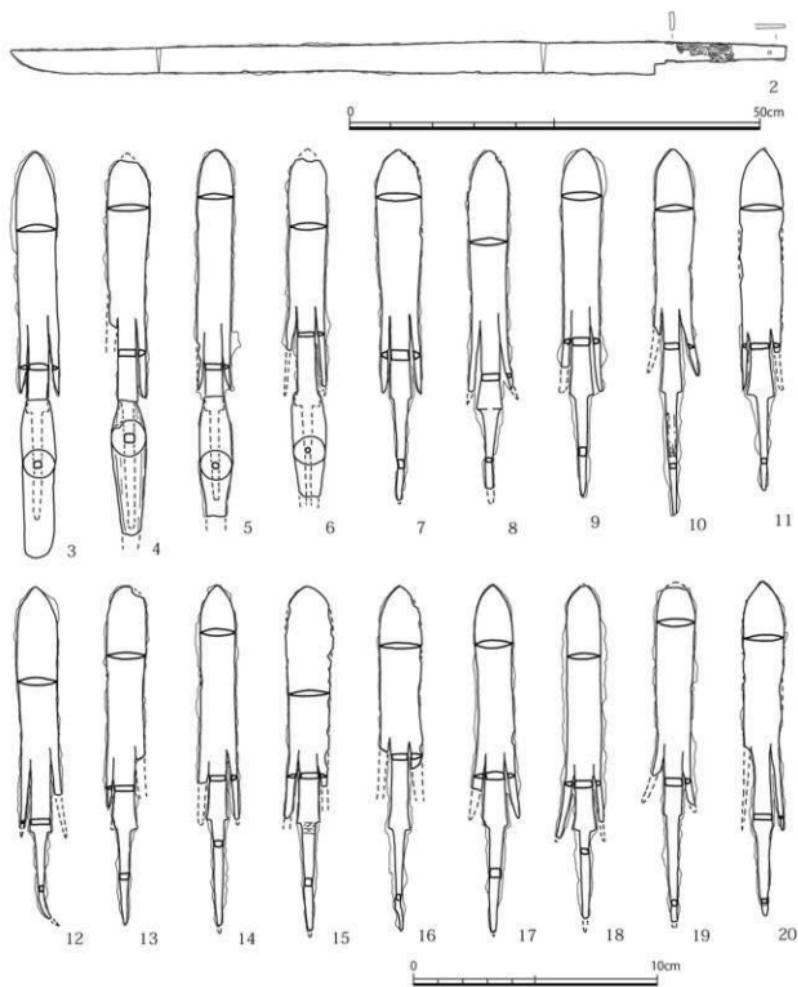
### 横矧板鉄留短甲 (第9～11図、図版6～9)

横長の鉄板を前胴、後胴とともに縦上3段、長側4段の7段に積み鉄留する。右脇を方形の蝶番金具で連結した、右前胴開閉式の横矧板鉄留短甲である。前胴高35.8cm、後胴高44.9cm、最大幅46.0cmを測る。厚さ1mmの鉄板を地板、帶金などあわせて22枚用いている。

左前胴は後胴と一体造りで、右前胴は別造りである。そのためか左前胴と右前胴とは地板や帶金の幅、鉄の間隔などで若干異なる。頭頭は直径1.0cm程で大きく、押付板、帶金、裾板に留め、地板と固定する。鉄間はおよそ5.0cmだが、全体的にはまちまちで統一性はとれていない。引合板の鉄は帶金を挟むように留めている。覆輪は押付板の上縁、裾板の下縁を鉄の薄板で挟み込んで鍛接した鉄覆輪である。

右前胴と左前胴の縦上第2段の地板には横方向に並んで0.1cm程の孔が穿たれる。短甲を肩で吊るための肩上の繋孔で、後胴の縦上第3段の帶金と第4段の地板にある孔と対になる。また右前胴と左前胴の長側第3段の地板にも横方向に並んで0.1cm程の孔ある。胴回りを調節するために穿たれた腰結孔である。

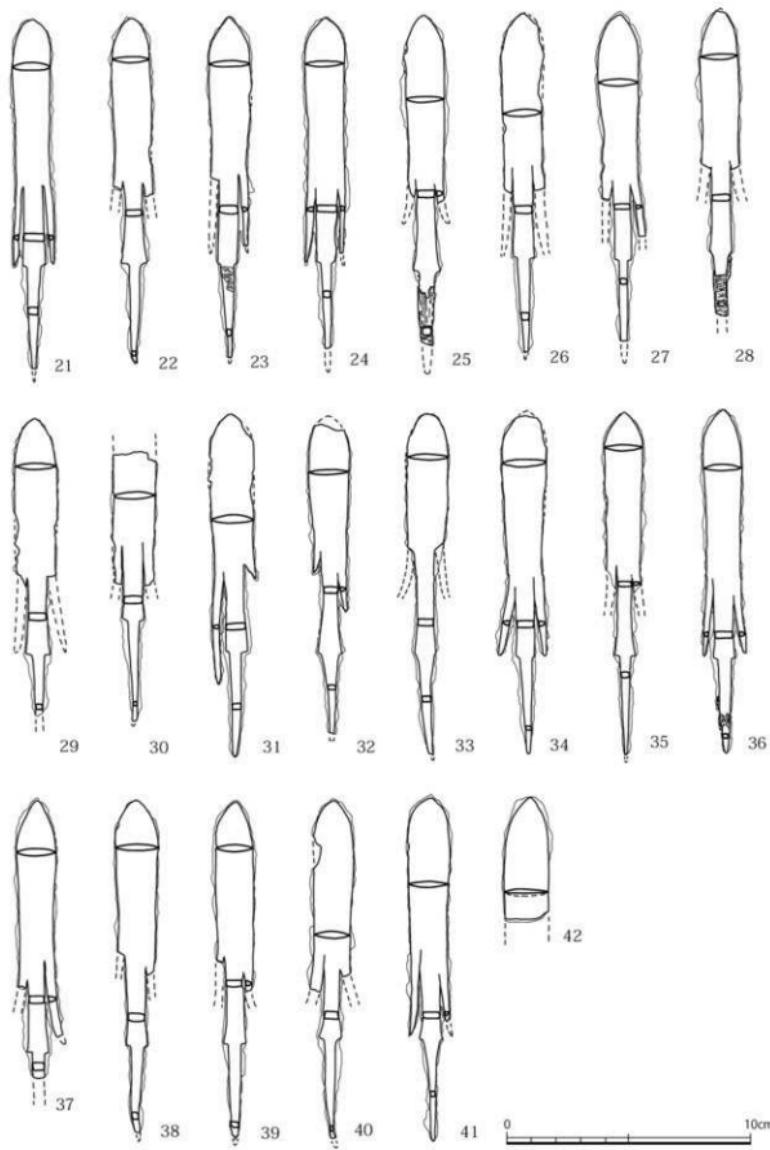
蝶番金具は右胴にある。右前胴の蝶番板の上に、一辺3cm程の鉄製の方形金具を2つ、鉄で留めている。鉄は方形金具の左より上下に2鉄ある。右後胴の方形金具は長側第2段の帶金と長側第4段の裾板にそれぞれ鉄で留めている。鉄は右前胴とは異なり3鉄で留める。なお方形金具の下部には連接に用いた皮革が残る。



第12図 馬場代2号墳出土大刀および鐵鎌実測図 (1/2・1/6)

なお、短甲は不時発見で破損していたので、九州歴史資料館の協力を得て復元作業、保存処理を行った。大刀（第12図、図版10）

大刀は平造りの直刀で全長97.2cmを測る。関部を挟み、刀身長80.7cm、茎長16.5cm、背の厚みは0.7cm前後ある。関部は直角に切れ込んだ一段の片関である。一見すると二段の片関にも見えるが、茎基部の浅い段は茎元抉と判断できる。茎尻にかけてやや幅を狭める。茎尻は一字文である。目釘孔は茎尻から2cm、10.2cmの2ヶ所に認められる。なお10.2cmの箇所には目釘が遺存する。鍔元孔はない。茎には把木が一部残存し、その木目は大刀と平行する。一方、茎の背には大刀と直交する複数の繊維が認められる。以上より把の構造は、薄板2枚で茎を挟み込み、その上から繊維を巻き付けたものと想定できる。

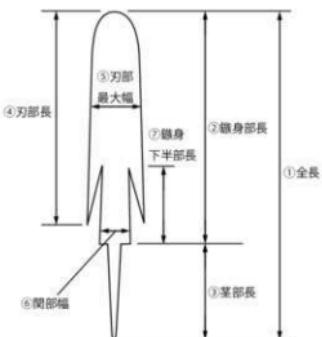


第13図 馬場代2号墳出土鐵器実測図2 (1/2)

### 鉄鎌（第 12 ~ 14 図、表 1、図版 11 ~ 12）

鉄鎌は脇抉柳葉式 1 種類のみで、総数 40 本出土した。全長は 14cm 前後である。各鉄鎌の法量は表 1 を参照いただきたい。計測部位は第 14 図に示した通りである。

3 ~ 6 の 4 本は矢柄が一部残る。矢柄は中空で筒状となり、籠竹などを材に用いたと考えられる。矢柄との装着法は 28 に観察できるよう、茎に糸状の纖維を巻きつけて矢柄が抜けないようにしている。3 ~ 6 の観察から口巻きには樹皮を使用することが分かるが、遺存した矢柄先端に茎のサビに伴う縦の亀裂が入っており、樹皮を巻く方向やその単位幅などは分からぬ。なお樹皮の樹種同定は行っていない。大半は脇抉の長さが左右で一緒だが、31 や 32 のように左右で長さが極端に違うものもある。



第 14 図 鉄鎌の計測部位

番号	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
3 (17.07)	—	—	10.04	1.95	—	3.32	
4 (15.76)	—	—	9.81	1.92	—	3.28	
5 (15.53)	—	—	9.92	1.71	—	3.26	
6 (14.03)	—	—	(9.38)	1.75	—	(2.83)	
7 (14.53)	10.43	(4.10)	10.13	1.95	0.98	3.70	
8 (14.13)	10.31	(3.82)	(10.05)	1.73	1.06	(2.98)	
9 14.42	10.19	4.23	10.09	1.85	0.90	3.48	
10 15.42	10.21	5.21	9.33	1.74	1.03	2.74	
11 14.25	10.21	4.04	10.05	1.85	0.90	2.28	
12 (13.89)	10.28	(3.61)	(10.08)	1.88	1.06	(3.10)	
13 14.04	10.20	3.84	9.39	1.77	(0.98)	2.41	
14 (14.26)	9.97	(4.29)	9.91	1.74	1.06	(3.21)	
15 (14.29)	10.19	(4.10)	(9.66)	1.94	0.95	(3.03)	
16 14.35	10.04	4.31	(7.48)	1.83	1.08	(0.82)	
17 (14.39)	(10.01)	(4.38)	(9.77)	1.60	1.20	3.06	
18 (13.90)	(10.30)	(3.60)	(10.55)	1.99	1.11	(3.28)	
19 (13.96)	(9.71)	(4.25)	(9.01)	1.80	1.03	(2.63)	
20 (13.45)	10.65	(2.80)	10.29	1.88	1.06	3.52	
21 (14.35)	10.18	(4.17)	10.18	1.82	1.09	3.15	
22 14.03	10.38	3.65	(7.58)	1.77	1.07	(0.84)	
() は残存長							
番号	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
23 (14.09)	10.28	(3.81)	(9.51)	1.92	0.99	(2.97)	
24 (13.73)	10.08	(3.67)	10.26	1.83	0.95	3.09	
25 (13.59)	10.76	(2.83)	(7.96)	1.96	1.17	(0.67)	
26 (14.08)	10.22	(3.86)	(7.58)	1.77	0.99	(0.99)	
27 (13.64)	10.38	(3.26)	(9.43)	1.92	1.00	(2.34)	
28 (12.55)	(10.14)	(2.41)	(6.56)	1.88	1.08	(0.55)	
29 (12.28)	10.04	(2.24)	(7.15)	1.91	1.11	(0.42)	
30 (10.80)	(7.32)	(3.48)	(5.71)	1.91	1.13	(2.04)	
31 14.33	10.31	4.02	11.05	1.80	0.97	4.28	
32 (12.84)	(9.63)	(3.21)	(7.87)	1.81	1.03	1.10	
33 (14.05)	11.06	(3.05)	(5.94)	1.74	1.06	—	
34 (13.83)	(10.09)	3.74	(9.95)	1.88	0.97	3.06	
35 (14.14)	10.14	(4.00)	(7.43)	1.78	1.13	(0.44)	
36 14.14	10.28	3.86	10.18	1.73	1.11	3.10	
37 (11.45)	10.48	(0.97)	(9.87)	1.81	1.10	(3.16)	
38 (13.73)	10.16	(3.57)	(7.25)	1.86	1.04	(0.58)	
39 (13.91)	10.31	(3.60)	(7.80)	1.75	1.04	(1.25)	
40 (14.04)	10.28	(3.76)	(8.14)	1.87	1.06	(1.50)	
41 14.38	10.20	4.18	10.15	1.82	1.01	3.15	
42 (5.26)	(5.26)	—	(5.26)	1.82	—	—	

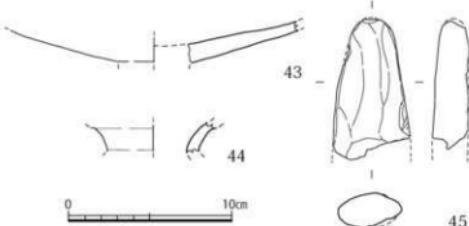
表 1 鉄鎌計測表

### 土器（第 15 図、図版 12）

43 は土師器高環の环部片。1 レンチ第 1 層より出土。44 は須恵器壺ないし甕の頸部片。4 レンチ第 1 層より出土。

### 石器（第 15 図、図版 12）

45 は磨製石斧の基部片。蛇紋岩製で、残存長 8.7cm を測る。墳丘表土直下より出土。



第 15 図 馬場代 2 号墳出土土器・石器実測図（1/3）

## 第4章 結語

馬場代2号墳は墓地造成に伴い発見され、およそ4ヶ月間にわたり発掘調査を行った。本墳は円墳と考えられ、周溝を併せた墳丘規模は直径約14mにおよぶ。主体部は小型の竪穴式石室で、横矧板鉄留短甲、大刀、鐵鎌が副葬されていた。

以上の調査成果をもとに、結語として本墳の築造年代について考察を行い、古墳時代の京都平野における本墳の位置づけを考えてみたい。

### 第1節 馬場代2号墳の築造年代

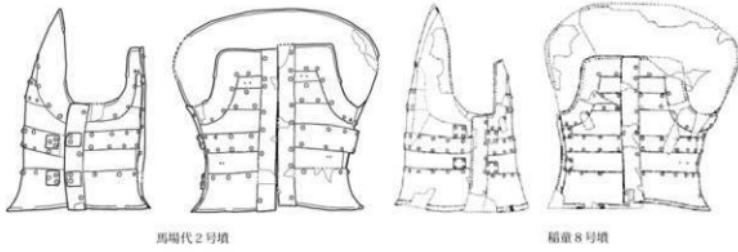
馬場代2号墳は竪穴式石室を主体部とすることから初葬時が築造年代といえる。よって副葬品の年代的考察を行えば、古墳の築造年代に近づくものと考える。

大刀は平造りの直刀である。古墳時代の大刀をあつかった白杵勲氏の分類によると「直角片闊一文字尻中細茎」の平造り大刀になる(白杵1984)。類例に佐賀県壱路寺古墳(5世紀前半)、大阪府堂山1号墳(5世紀中頃)、奈良県新沢千塚173号墳(5世紀後半)出土例を挙げている。以上より「直角片闊一文字中細茎」の大刀は5世紀代に位置づけられる。

鐵鎌は腸抉柳葉式1種類のみである。古墳時代前期から中期にかけての古墳副葬鎌をあつかった川畠純氏の分類によると「腸抉柳葉C-4型式」に該当する(川畠2009)。「腸抉を持つ鎌身部と鎌身下半を持ち、茎闊が角闊となるもの」で、「鎌身部が9.0cm以上で、腸抉の深いもの」と定義され、類例に岡山県隨庵古墳出土例、京都府德雲寺6号墳第3主体出土例を挙げている。氏の画期設定ではIV期(古墳時代中期後半から末)の標識型式とされる。

横矧板鉄留短甲は直線距離で1.5km離れた稻童古墳群中の8号墳、21号墳でも出土している(行橋市教育委員会2005)。特に8号墳出土例は右前胸開閉式と本墳出土例と共に通するため両者の比較検討を行いたい(第16図)。まず近似する点は、右前胸が別造りであるため地板の幅や鉢の間隔などが一定でなく、技術的に未熟であることである。その中において鉢頭の大きさは稻童例が0.8cmなのに対し、本墳の短甲は1.0cmと大きく鉢の数も少ない。蝶番金具は稻童例が金銅製で装饰を持つのに対し、本墳の短甲は鉄製で装饰はない。また蝶番金具の鉢の数も稻童例が4鉢であるのに対し、2鉢ないし3鉢と少ない。以上の点から、稻童8号墳出土例より本墳出土の短甲が技術的に未熟であり、型式学的に後出するものと結論付けることができる。稻童8号墳の築造時期は5世紀後半に位置づけられている。

以上より本墳は5世紀後半に築造されたと考えられる。稻童8号墳との前後関係から5世紀後半でも未に近い頃であろう。



第16図 馬場代2号墳と稻童8号墳出土の横矧板鉄留短甲

## 第2節 京都平野における馬場代2号墳の位置づけ

京都平野は瀬戸内地域の西端に位置し、港湾としての自然環境に恵まれている。この地域は福岡県内でも宗像地域や浮羽地域と並んで甲冑の出土が特に多い。管見の及ぶ限りでは、古墳時代前期から後期までの間に約15の古墳から甲冑が出土している。前期の甲冑が茹田町石塚山古墳例、行橋市ビワノクマ古墳例、後期の甲冑が茹田町番塚古墳例のみで、残りは古墳時代中期に位置づけられる甲冑である。いかにこの地域に甲冑を保有する中期古墳が集中するか分かる。その多くは平野に湾入する海浜部に立地する。

馬場代2号墳の石室は、山中英彦氏のいう「塊石小口積の竪穴式石室（Ⅱ類）」で、このタイプの石室にはしばしば甲冑類が副葬されることが指摘されている（行橋市教育委員会2005に所収）。茹田町百合ヶ丘16号墳の三角板革縫短甲、同猪熊1号墳の衝角付冑と横矧板鉢留短甲が類例として挙げられ、いずれも軍事力を保有した被葬者像が想定されている。

馬場代2号墳の被葬者像を想定するにあたり、先述の稻童古墳群の存在がヒントになろう。稻童古墳群では4領の甲冑副葬があり、盟主墳である石並古墳（20号墳）とその陪塚のあり方からも、京都平野における古墳時代中期の軍事的首長層が存在したことを裏付ける。この時代の甲冑の大部分は畿内で制作されて、地方に配布されたと考えられている。こうしたことから、この地域には稻童古墳群の盟主のように、大和王権と密接な関係をもち、かなり軍事力を保有した豪族が存在したと考えられる。

5世紀代は「倭の五王」の世紀であり、『宋書』「倭国伝」中の「倭王武の上表文」にあるよう、大和王権は倭国の東西を統一し、韓半島にも進出しその緊張関係にも軍事介入した。京都平野は上述の自然環境や甲冑保有古墳の集中などから国内のみならず韓半島への渡海の拠点としての軍事的要地であった可能性が高く、当地の豪族は大和王権によって統率された軍隊として動員され、戦地に渡海したと考えられる。馬場代2号墳の石室が未盗掘であったことから、5世紀後半段階の小型円墳の副葬品の本来的な在り方を知ることができた意義は大きく、被葬者は石並古墳や短甲2領と冑、鏡などを副葬した稻童21号墳の被葬者のような上位の軍事的首長層のもとに組織された、武人集団の一員と考えられる。

### （参考文献）

白杵勲 1984 「古墳時代の鐵刀について」『日本古代文化研究』創刊号 古墳文化研究会

川畑純 2009 「前・中期古墳副葬鐵の変遷とその意義」『史林』92巻2号 史学研究会

行橋市教育委員会 2005 『稻童古墳群』（行橋市文化財調査報告書第32集）

# 図 版

1. 馬場代 2 号墳遠景  
〔北から〕



2. 馬場代 2 号墳調査前  
〔手前は天井石〕〔南から〕



3. 馬場代 1 号墳近景





1. 墳丘〔手前は周溝〕(東から)



2. 馬場代 2 号墳全景 (南から)



1. 1 トレンチ土層〔西半〕(南から)



2. 1 トレンチ土層〔東半〕(南から)



3. 2 トレンチ土層(南から)



4. 3 トレンチ土層(西から)



5. 4 トレンチ土層(西から)



6. 5 トレンチ土層(北から)



7. 西側切通し面土層(西から)



1. 石室掘方のライン（南から）



2. 壇穴式石室北小口面



3. 壇穴式石室南小口面



1. 積穴式石室全景（北から）



2. 枕石と大刀出土状況(西から)



1. 橫矧板鋤留短甲前胸



2. 橫矧板鋤留短甲後胸



1. 横矧板銛留短甲右側面



2. 横矧板銛留短甲左側面



3. 地板と帯金の重なり方



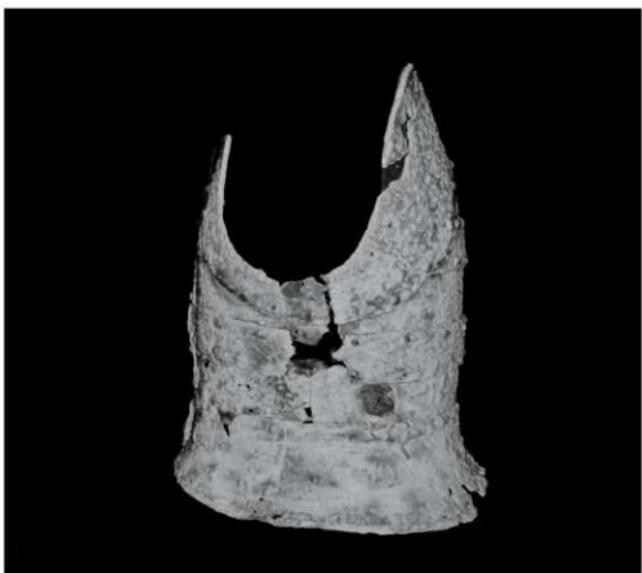
4. 蝶番金具



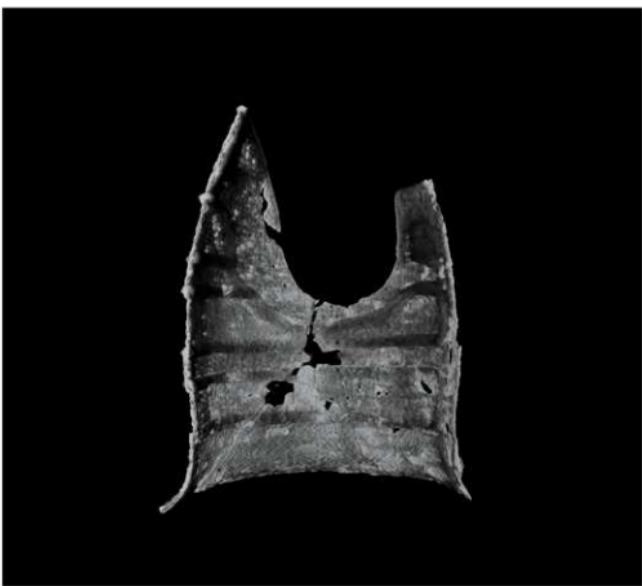
1. 横矧板鉢留短甲前胴X線CT写真



2. 横矧板鉢留短甲後胴X線CT写真



1. 横矧板鉢留短甲左側面X線CT写真



2. 横矧板鉢留短甲縦断面X線CT写真

1. 大刀



2. 大刀茎部



1. 鉄族 (3 ~ 32)



1. 鉄族 (33 ~ 42)



2. 矢柄の残存状況



3. 土器

4. 石器

## 報 告 書 抄 錄

2011年3月22日 発行

## 馬場代2号墳

行橋市文化財調査報告書第40集

著作権所有 福岡県行橋市中央1丁目1番1号

発行者 行橋市教育委員会

印刷者 福岡県行橋市南大橋3丁目15番19号  
京築印刷 株式会社